

こちら危機管理課お天気相談所

～気象防災アドバイザーによるすぐに役立つ気象情報を月1で配信～

※気象防災アドバイザーとは「地元の気象に精通し、地方公共団体の防災対応を支援することができる人材」として国土交通大臣が委嘱した方です。



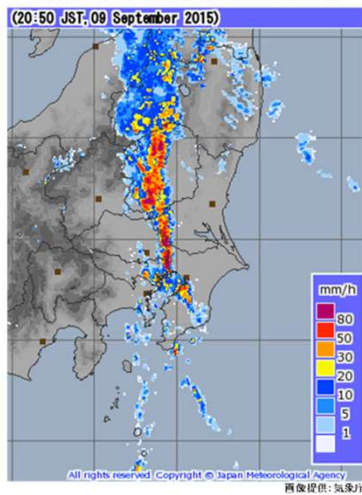
Yoshiaki Yano

“線状降水帯”が発生するぞ～！

近年、大雨・豪雨と言えは「線状降水帯」を思い浮かべる方も増えているのではないのでしょうか。豪雨のおそれがあるとき、大きな豪雨災害が発生したときに、“線状降水帯”という言葉がマスコミでも頻繁に用いられ、その知名度が随分上がってきたように思います。

“線状降水帯”という言葉は、2000年前後、梅雨の時期に九州で起きる中規模の強い上昇気流による激しい雨を、数年かけて解明していた研究者たちによって使い始められたと聞いています。一般的に使われるようになったのは、10年前の2014年8月、広島で3時間238ミリのとてつもない雨が降り、土砂災害などにより77名の犠牲者が出たときです。

関東・東北豪雨の線状降水帯



翌2015年に起きた“関東・東北豪雨”では、大規模な線状降水帯が発生、長時間にわたったことから、日光市では24時間500ミリを越える大雨となりました。鬼怒川が氾濫・決壊し、茨城県常総市の3分の1の面積を含む約40平方キロメートル、葛飾区の約35平方キロメートルを超える浸水被害が発生しました。ご記憶の方も多いのではないでしょうか。線状降水帯はその後、九州北部豪雨・西日本豪雨などでも発生し、各地で大きな被害を出しています。このようなこともあり、線状降水帯への関心が高まり、近年では中学受験の入試問題にも出ているそうです。

線状降水帯は、単に積乱雲が並んでいるのではなく、幾つかの積乱雲が群れを成し、更にそれらが集まって線状降水帯を作ります。気象庁は線状降水帯を、“次々と発生する発達した雨雲（積乱雲）が列をなした、組織化した積乱雲群によって、数時間にわたってほぼ同じ場所を通過または停滞することで作り出される、線状に伸びる長さ50～300km程度、幅20～50km程度の強い降水をともなう雨域”と定めています。台風や、前線を伴う低気圧による強い雨域はある程度の速度で移動して行きますが、線状降水帯では、大雨を降らせる個々の積乱雲は移動して行くものの、ほぼ同じ場所で、次から次に積乱雲が発生・発達を繰り返すので、全体を見るとあたかも強い雨域がほぼ停滞しているように見えます。一つの積乱雲でも局地的な大雨（ゲリラ豪雨）を降らせ、被害が発生させることもあります。発達した巨大な積乱雲の群れが次々襲い、“これでもか！これでもか！”という降り方は、正に恐怖です。線状降水帯が降らせる雨の源は、海から補給される大量の水蒸気で、海面温度が高い南の地方ほど発生頻度が高くなっています。また、“同じような場所で数時間にわたり強く降り、100mmから数百mmの雨量をもたらす雨”である「集中豪雨」の6～7割は線状降水帯によるとの調査結果もでています。



集中豪雨の60～70%が
線状降水帯による

集中豪雨

線状降水帯



大規模な台風や低気圧などの発生・移動の予測は、比較的容易ですが、これらより規模が一段小さい線状降水帯になると予測は難しくなります。気象庁は2022年6月から、線状降水帯による大雨の可能性について、関東甲信地方など“地方”単位で、半日程度前から呼びかけを開始していますが、先月5月からはこの地域が絞り込まれ“都府県”単位で発表されることになりました。東京都については、東京地方・伊豆諸島・小笠原諸島の3つの地域に分けられています。この呼びかけだけで避難を開始する必要はありませんが、スマホやテレビなどで知ったときに

は、大雨災害発生の危機感をもっていただき、避難に向けての具体的な検討・準備、心構えを一段高めていただくことが重要です。ただ、この呼びかけの的中率・見逃し率は、必ずしも期待するほど良くないかも知れませんが、実際に大雨になる可能性は高いです。なお、線状降水帯により大雨災害の発生の危険度が急激に高まることを、最大30分程度前に発表されます。線状降水帯が“発生しているよ”“これから発生するよ”というもので、少しでも高いところに避難し、身の安全を図っていただきたいと思います。

地球温暖化が進行すると、線状降水帯をはじめとする極端な大雨が、さらに増加する可能性が高くなります。普段から防災情報に関心を持っていただき、対策や備え、また具体的な避難方法などについて共に考えていきたいと思います。

問い合わせ先 危機管理課計画係 電話 3993

令和6年6月10日
危機管理課発行